

黄金の国

劇団「くるま座」第9回公演
 原作 小説「沈黙」 遠藤周作 脚本/磯見辰典 演出

ローマ教会に一つの報告がもたらされた。
 ポルトガルのイエズス会が、日本に派遣していたクリストヴァン・フェレイラ神父が
 長崎で「穴吊り」の拷問をうけ、棄教を誓ったというのである。——『沈黙』より

—— 島原の乱 2年後 ——

バーデレ・フェレイラは、幕府の厳重なキリシタン追放令にもかかわらず、キリシタン
 信徒たちを捨て去るに忍びず、ひそかに日本に隠れ残っている潜伏司祭だった。
 デウスの教えを守ろうとする百姓たち、表向きは棄教している奉行所の役人朝長作右衛門
 らに小さな納屋にかくまわれ、夜ごとひっそりと十字架を掲げ、蠟燭を立てミサを行い
 百姓たちのコンヒサン（告解）を聞く日々を送っていた。

その頃、長崎のあちこちの村では百姓信徒たちが捕らえられ、拷問にかけられ、
 それでも転ばぬ者が次々に処刑されていった。

江戸から下った宗門奉行井上筑後守は、キリシタンたちの根であるバーデレ・フェレイ
 ラを捕らえようと、蛇のように狡猾な罠を巧妙にしくんでいく。

朝長が捕らえられたことを知ったフェレイラは、畏と知りつつ奉行所に出席する。

執拗な脅しや拷問にしだいに迫りつめられたフェレイラは、ついに百姓信徒たちの前で
 棄教の証しである踏み絵を踏んでしまう。

最後までフェレイラを守ろうとした朝長作右衛門は、その時すでに穴吊りにて殉教し、
 フェレイラに見捨てられたと感じた百姓たちも多くは覚悟の殉死をとげる。

—— 主な 登場人物 ——

バーデレ・フェレイラ

クリストヴァン・フェレイラ。ポルトガル、ジブレイラに生まれる。
 1610年頃日本にイエズス会宣教師として渡来、20年余布教活動を続けた。
 1633年、宗門奉行井上筑後守の手にかかり棄教する。
 その後死刑囚沢野某を名のり、17年後、呪われた生涯を長崎にて終える。

井上筑後守

宗門奉行。もとキリシタンであったが、禁令により棄教している。
 英雄的殉教は逆効果と考え、踏み絵や穴吊りを考え出した。

朝長作右衛門

奉行所の役人。棄教したふりをしているがフェレイラをかかまっている。

平田主膳

井上筑後守の腹心。キリシタンを憎む。

嘉助

百姓信徒たちのリーダー的存在だが、生来臆病なため心ならずも
 フェレイラを裏切ってしまう。

☞ 私事ではございますが、裏切り者の「嘉助」役はミルクホールの正直者、
 曾根君が始めて演じます。また、マスターが「のろ作」を、「源之介」
 「はつ」などをミルクホールの仲間たちが演じますので、
 宜しくお引き立てのほど、お願い申し上げます。

Information

劇団くるま座第9回公演
 黄金の国 三幕 遠藤周作/作・磯見辰典演出

★鎌倉市中央公民館分館 6月19日(金)夜6時
 20日(土)昼2時
 ★朝日生命ホール(新宿) 6月26日(金)夜6時
 27日(土)昼2時

☆鎌倉公演 前売り 2000円(当日2500円)
 ☆東京公演 前売り 2500円(当日3000円)
 ミルクホールにて前売り券予約・販売承っております。
 電話予約も承りますので、ご連絡ください。 ☎0467(22)1179



台本を読んで・・・

COLUMN

原作「沈黙」とともに、江戸初期の長崎における歴史的記録に基づいて書かれた
 この物語は、日本のキリスト教草分けともいえる隠れキリシタンたちの不毛の歴史
 理不尽な運命を、あまりに残酷な、殉死の栄光すら許されない穴吊りという拷問を
 通じて絶望的に描いている。

この物語にははっきりとした起承転結の形がなく、第一幕から三幕まで一貫して
 常に同じ問いかけが繰り返される「なぜ、神は沈黙しているのか。」という不条理
 な悲しみ、まさに原作『沈黙』の表題そのものがテーマになっているかのように見
 える。しかしこの不毛の物語を何度も繰り返し読む内に、原作には描かれていない
 まったく別の『黄金の国』の脚本としてのテーマが浮かび上がってくる。

この芝居の不思議な構成はむしろ音楽的であり、小さな貧しい村の納屋の中に祭
 壇を持ち、奉行所という断罪の広場をもつこのストーリーが映し出すものは、一つ
 の史実という意味を越えて、聖書の普遍的テーマであるイエスの受難であり、ユダ
 が裏切り、弟子たちが裁判官ピラトに対してイエスを否認した、イエスの受難曲を
 歌い上げている。ここでのイエスは偶像化された踏み絵となって現れる。そして
 第三幕のクライマックス、踏み絵を踏もうとするその時、フェレイラは司祭ではな
 く一人の人間として、踏み絵の中にイエスの復活を見る。

第三幕第四場、みじめに辱められ、もはや宗教的栄光も失くしたフェレイラこと
 沢野忠庵と裏切り者の嘉助。この場面においてもっとも作者の言わんとする宗教的
 テーマ——(神の恩寵)はもともと無力でみじめな者の側からやってくる——
 という暗示があらわれる。無力で孤独であるがためにフェレイラの中に一人の人間
 としての真の信仰が戻ってくるのである。

そして第三幕第四場の最後の場面。役人に扮した演出家自身から語られる台詞。
 ……さきほどその頭のみ波の上黒う七つ並びました。

ここには、ヨハネの黙示録に記される永遠の神と子と聖霊を示す『七つの霊』が、
 顕される。

この物語は三幕を通じて原作者が宗教的テーマを壮大に描こうとした戯曲である。

